

### 3 プレスビテル・ヨーハンネース

『書簡』<sup>1)</sup>

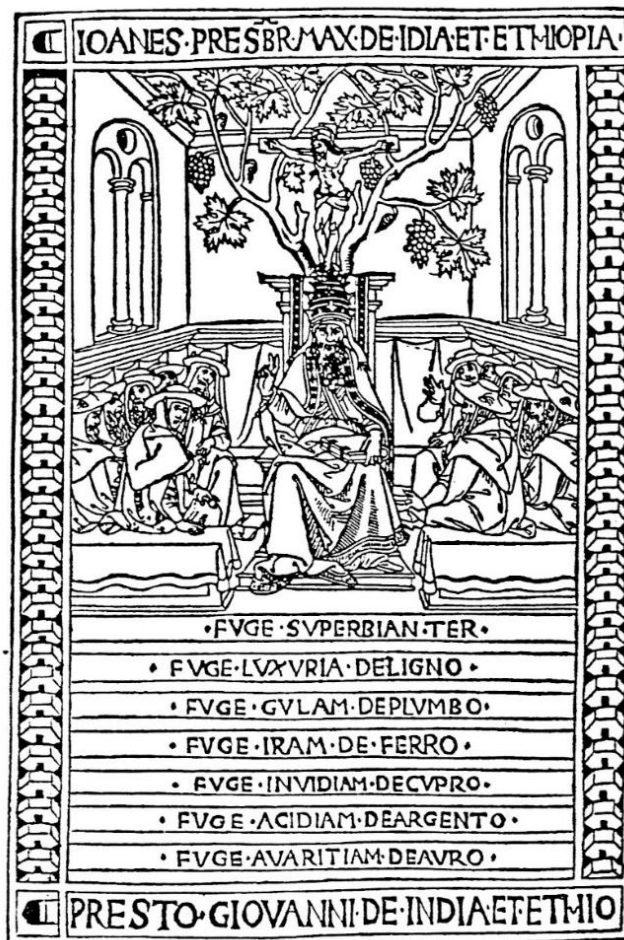


図1 司祭ヨハネ

## 0 はじめに

ドローゴは、じっと無言のまま歯を食いしばって茂みや岩陰に身を潜めている不思議な敵、タルタル人の気配が感じられるような気がした。暗くなるのを待って襲いかかろうとしているのだ。その間にも、恐ろしいようよとした群が北の霧からゆっくりと姿を現わし、ぞくぞくと押し寄せてくるようだった。彼らは、音楽も歌も輝く剣も美しい旗も持っていなかった。武器は陽にきらめかぬよう鈍くくすみ、馬はいななかぬよう訓練してあった。<sup>2)</sup>

国境線にあって、いつとも分からぬ昔からなぜか“タルタル人の砂漠”と呼び慣わされる荒涼たる平原に面した砦の中で、いつかは攻め寄せて来るに違いない恐るべき、しかし得体の知れない「不思議な敵」i misteriosi nemici を待って、いつしか年老い一生を終えてゆく軍人たちを詩情豊かに描いた、イタリアの戦後作家ディーノ・ブツァーティの小説『タルタル人の砂漠』の一節である。

タルタル人はしかし、ヨーロッパにおける東洋のイメージを決定したといわれるマルコ・ポーロにとっては、蛮族でも「不思議な敵」でもなかったはずである。彼は元朝カタイの富と、カアン・クビライの権力と偉大を賛嘆してやまなかった：

さて、これから本書では、現在君臨している大カーンの偉大な事績と大いなる驚異をのこらず皆さん方にお話することとしよう。その御方はクブライ・カアンと呼ばれ、私どもの言葉で諸君主の大君を意味するのだが、まことにそうした称号にふさわしい。なんとなれば、かの大カアンは、人間・領土・財宝において、私どもの始父アダムより今にいたるまでかつて存在し今も存在する最も偉大な人物であること、誰の目にも明らかだからだ。<sup>3)</sup>

対モンゴル観のイメージのこのような違いと、今なお一般的な、得体の知れぬ・謎のようなといった、前者のイメージはいったいどこから由来するのであろうか。

ごく大雑把に言えば、いわゆる世界を制覇し「ヨーロッパ化」したと称される帝国主義の十九世紀、その力を生み出した産業革命の十八世紀、その下地を作った通商圏と植民地の拡大の十七世紀、その基礎を据えた「大航海時代」の十六世紀、その端緒となった人間と世界の発見の「ルネサンス」の十五世紀、そしてそ

の大きな動機となったのが、インドの驚異にカタイの富そしてジパングの黄金を語る十四世紀初頭の『東方見聞録』であった、というのがマルコ・ポーロを、すべてをヨーロッパ近代へと流れ込ます歴史の河を遡る形で、その偉大な水先案内人に仕立てあげるやり方であったことは、前に序でも見た<sup>4)</sup>。では、その水先案内人が登場するまでの流れは、一般にどのようにたどられるのであろうか。

水源は例によって古代ギリシアあたりに求められよう。そこから湧き出た、自らを「世界の中心」とするヘレニズム文明は、かつての「蛮族」ローマへと流れ込んで地中海全域に広まり、そのローマも今度はゲルマンという北方の「夷狄」の侵入によって滅びるのだが、その頃にはこれまた普遍主義的なキリスト教という新たな水脈を東方から引き入れることによって、またしてもその夷狄や新たな蛮族ノルマンを同化し、アルプス以北のフランクを中心としてかつてのローマ帝国に代わる「ヨーロッパ」が形成された。かくて中世には、著しく膨張したそのヨーロッパの地理的・文化的概念の＜自なるもの＞の自己同一性の指標は、古典ギリシア・ローマ文明の伝統とキリスト教という唯一超越神の宗教となっており、ともに普遍主義的・絶対主義的で、自らを世界の中心とするイデオロギーにおいて共通していた。

したがって、＜異なるもの＞とは、その周囲を取り巻く、西は「いまだかつて誰も横切ったことのない」大洋、北は「常闇の国」、南は「黒い大陸」アフリカ、そして東はインドに代表される「驚異と神秘」の東方という、いずれにしても「異界」であり、その上にもう一つ、かつての「我らが海」地中海の彼方に勃興しつつあったイスラムという「異教」をもった。ムスリムは、かつてのローマやゲルマンのように教化・同化可能な未開の「蛮族」ではなく、同じ水脈を引く宗教をもち、ほかならぬギリシア・ローマの文明を受け継いで、実は彼らよりも開化された、もはやいかにしても相容れぬ教敵であり、その敵との闘いは「十字軍」という聖戦とならざるをえなかった。<sup>5)</sup>

そんな中世も末の十三世紀、ヨーロッパ人の知らぬ間にはるかアジアの奥深くに興り、またたくまに日本海から黒海、アムール川からドナウ川にまたがる大帝國を打ち建てたのがモンゴル、彼らの呼ぶタルタルであり、そこへ登場するのがマルコ・ポーロということになる。そして十四世紀、その「モンゴルの平和」の崩壊、ティムール帝国の成立、オスマン・トルコの興隆等によりモンゴルが開いてくれたアジアへの安全な道が再び閉ざされるや、いったん開かれた未知の東方世界への興味とその伝えられるところの富の探求は、西回りでのインドやカタイ航路探索へと向かわずにはおかないのだった、という形で前述の後半部へとつながってゆくわけである。<sup>6)</sup>

とこのようにたどれば、歴史はいかにも一貫してヨーロッパを中心に展開して

いたように聞こえるが、事実はそうではあるまい。これはマルコを結び目にして都合のいい縦緯を繋いだ物語りであって<sup>7)</sup>、少なくとも当時は逆だったであろう。優位にあったのは、地中海から締め出されアルプスの彼方に追いやられて自開的な社会を形成し、ダンテの悲憤もさこそと思われるほどに聖俗両権の抗争に明け暮れ、分裂し弱体化したキリスト教ヨーロッパではなく、むしろ異教非ヨーロッパの方、すなわち、古代ギリシア・ペルシアの学芸を継承し、はるかに高度な知と技術の水準を保ち、地中海を「アラブの湖」にかえて征海権を握り、東方貿易をも一手に独占していたサラセンの方であった。また当時繁栄を誇ったのは、かつての帝国の正統な後継者であり、地の利を得た東ローマ帝国ビザンチンであり、「野蛮な田舎者」たちからなる十三世紀初めの第四国十字軍は、聖なる攻撃目標をその都コンスタンチノーブルの略奪に変えたほどであった。

久しく内陸部フランクに主導権を奪われていたかつての中心地中海沿岸、とりわけラテン・イタリア諸都市の興隆（いわゆる「商業の復活」）もそのおかげであり、当時西側最大の国際都市ヴェネツィアの富とて、「オリエントの出店」と呼び慣わされるように、もっぱらイスラム商人が運んできた東方の商品をビザンチンや西方ヨーロッパ諸国に仲介貿易することによって積み上げられたものであって、ポーロ家も事実そうした商人の一人にすぎなかった。そのマルコの旅行とて、ユーラシア大陸を平定し駅通制度を整え、強力な軍事力と整った行政力で道中の安全を保障した各地のモンゴル政権と、その通商ルートを踏みならしたイスラム隊商の伝統、そして帰路ペルシアまでコカチン姫ともども無事送り届けた元朝の海運力と古来からの南海ルートがあって初めて可能になったものに他ならない。<sup>8)</sup>

こうして国際通商の桎梏から締め出され、外の世界からの情報も断たれていたヨーロッパにとって東方は、北方が蛮族の故地であったのに対して、宗教地理的にはそこにあるはずの「地上楽園」から神の光恩寵のやってくる方向であり、聖地エルサレムのある方向、文明地理的には古典文明の故地ギリシアとローマの分身ビザンチン帝国があり、その向こうにはアレクサンデル遠征によって伝えられ、なお古来の栄華をしのぼせるペルシアが、さらにまたその彼方には、諸々の伝説や文献が語り継ぎ、現にそこからやって来る香料や絹などが珍奇な品々が証明する神秘と驚異のオリエント、とりわけインドがあるはずの方向であった。が、その東方はイスラムによって隔てられていた。

ところが、そうした状況にあったヨーロッパをアルプスの彼方から再びかつての「我らが海」地中海へと誘い出し、その東方、少なくとも中ほどにある近い東方を彼らにとって現実のものに変えたのが、古代ローマ帝国末期以来常に「蛮族」の侵入の対象であったヨーロッパのもった最初の反攻たる十一世紀末に始まる十字軍遠征であり、それは政治的・宗教的意図と成果とは別に、実際にその戦士た

ちにコンスタンチノーブルの栄華とシリアの繁栄、聖地の有難さを直接眼で見手で触れさせるものとなった。と同時に、それ以遠の東方に関する新しくかつ事実らしい情報も、ビザンチンの宮廷やムスリムとの接触を通して伝わって来始める。

10)

その十字軍運動の展開も思わしくない十二世紀半ば頃、こうして伝えられたのが、彼方の東方に無限の富と力を持った一人のキリスト教司祭王が統べる広大な王国が存在するという耳寄りな噂であり、それを確信させたのが、そこから発信されたという手紙、『プレスビテル・ヨーハンネースの書簡』であった。ここに東方は、ヨーロッパにとって新たな意味と幻想をもって存在し始める。古代・中世を通じて語り継がれてきた驚異・神秘・無限の富といったものの他に、“プレスビテル・ヨーハンネース”という幻想の新たな一項目を付け加え、その国の探索と提携が現実の目標となったからである。

1) 初出：(「愛媛大学教養部紀要」23, 1990, pp. 19-40。図1：ジュリアーノ・ダーティ Giuliano Dati (1445-1523) の騎士物語歌謡「大インディアならびにエティオピアの君主プレーテ・イェンニの大いなる驚異」表紙(15世紀末)。

2) Dino Buttztti, *Il deserto dei Tartari*, Milano, Mondadori, 1973 (初版 1940), p. 112; 奥野択哉訳「20世紀の文学」第33巻、集英社、1968, pp. 121-252; \* [協功訳『タタール人の砂漠』岩波文庫、2013]。

Dino Buzzati (1906-72)：北イタリア・ベッルーノ生。永く *Corriera della Sera* 紙の記者をも勤める。日常の神秘や人生の不思議を幻想的・寓意的な文体で語り、イタリアのカフカとも擬せられる。代表作に、*I sette messaggeri*『七人の使者』1942、*Sessanta Racconti*『六十の物語』1958、*Un amore*『ある愛』1963、*Il colombre*『コロンブレ』1966、等。

3) *Il milione*, a cura di L. F. Benedetto, Firenze, Leo Olschki, 1928, p. 6; *Le Meraviglie del Mondo*, a cura di L. F. Benedetto, Milano-Roma, Treves, 1932, p. 104。

4) とりわけコロンブスとの関係が強調されるのが常であり、西廻りで航海すればインディア及び大カアンの国に至ることをコロンブスに決定的に確信させた文献として、その航海誌の編者ラス・カサスはペドロ・デ・アリアーコの『世界像について』と共に『東方見聞録』を挙げている。その間の経緯については、東方に関する詳しい情報を提供したとされるフィレンツェの地理学者トスカネッリ(1397-1482)のコロンブス宛二通の手紙にみられる：ラス・カサス(長南実訳)『インディアス史』一、岩波書店、1981、pp. 118-28。

5) そうした運命に翻弄される古代ローマ帝国の故地なる祖国イタリアに対する憂

憤がダンテ『神曲』の政治的背景となっていること、ゲルマンを「北方の蛮族」と呼びながら、その末裔である神聖ローマ皇帝フリードリッヒ二世（もっとも、シチーリア生まれで、ドイツ人であるよりもイタリア人であったといわれ、ブルクハルトのいわゆる開明的な「最初の近代君主」）にその統一の期待をかけざるを得なかったこと、ギリシア・ローマの偉人たち、アリストテレスやウェルギリウスをキリスト以前であるが故に辺獄に落とさざるを得なかった矛盾等については、前章でも若干見た。

- 6) 当時中国との交易がいかに盛んであり、その通商路がいかに安全であったかは、14世紀前半のフィレンツェ・バルディ商会員ペゴロツティの『商業案内』、Francis Balducci Pegolotti, *La pratica della mercatura* (ca. 1330), に証言される。これからしても、その開鎖がヨーロッパにとっていかに痛手であり、それに代わるルートがいかに必要であったかが推し量られる：'Pegolotti's Notices of the land route to Cathay', Yule-Cordier, *Cathay and the Way Thither*, Nendeln-Liechtenstein, Kraus Reprint, 1967（初版 Hakluyt Society, 1913-6), vol. III, pp. 135-73；田中英道・優子「ペゴロツティ『商業指南』一訳と註釈」『イタリア学会誌』XXXIII, 1984, pp. 148-70（抄訳）、等。＊〔拙訳「ペゴロツティ『商取引実務』（抄）」『原典中世ヨーロッパ東方記』名古屋大学出版会、2019〕。
- 7) 例えば、地理的知識についてもユールは、古代から近世に至るヨーロッパ及びアラブの文献に見られる中国に関する記述を編んだその大著『カタイとそこへの道』の狙いを、「本書の目的とするところは、ギリシアの群小地理学者たちがプトレマイオスに対して持っているのと同じような関係を、ポーロに対して持たせようとするところにある」、と説明する（Yule-Cordier [1967], *op. cit.*, vol. I, pp. vii-viii）。
- 8) 地中海から東アジアに至る当時の国際通商の担い手としてのイスラム隊商とその資本の役割やポーロたちとの関係については、飯塚浩二『東洋史と西洋史とのあいだ』、岩波書店、1963:「ヨーロッパ人に言わせれば、ここで少なくともマルコ・ポーロあたりを立て役者にしたいところだろうが、彼自体イスラム系の商人たちとモンゴル政権との提携の上に組織され維持されたところの隊商路に便乗させてもらった一介の旅鳥にすぎない」（p. 68）。
- 9) TO図、コスマス、その他中世の地図が東を上を描かれるのはそのためであり、最も代表的なものとしてヘレフォード図（イギリス、13世紀末）がある。古代プトレマイオスは北が上。イドリーシー（シチーリア、12世紀）は、アラビアの伝統にのっとり南が上。マルコの情報を採り入れていることで知られるカタラン地図（1375年）となると、地上楽園は姿を消し、北を上とする：織田武雄『地図の歴史』講談社、1973、等。＊〔拙訳「カタラン・アトラス」『原典中世ヨーロッパ

『東方記』名古屋大学出版会、2019』。

10) とすればしかし、フランクによつて一度はアルプスの彼方に持ち去られた松舞台を、12, 3世紀にはヴェネツィア・ジェノヴァ・ピーサ等の通商海運力、ローマの教権の伸長、十字軍遠征等によつて再び地中海に取り戻し、後にルネサンスの繁栄を享けるイタリアにとっては、その結果ポルトガル・スペイン・オランダ・イギリスらの大洋の時代へと移り、沿岸都市の衰退を来たすことになったばかりか、19世紀末の統一にいたるまで、それら列強の支配下に置かれるに至ったのは皮肉である。

## 1 プレスピテル・ヨーハンネースの東方

そもその発端は十二世紀初めに遡る。1122年、叙任権闘争に一応の決着をみたヴォルムス協約の年、その報告をもたらすべくコンスタンチノーブルの宮廷に派遣された教皇使節たちはそこで、宗務執行上の助言を得るためにはるばるインドからやって来たというヨーハンネースなる主教（もしくは大主教）に出会う。ローマに伴われ来たり、ラテラーノ宮で時の教皇カリクストゥス二世（在位1119-24）にその謎の僧の語った話は、大要次のようなものであつた：

東方インドに広大なるキリスト教王国あり、その都には地上樂園より湧き出する四つの川の一つピソンが流れ、ありとある種類の宝石をもたらす。城壁の外、湖中に小高き丘ありて、頂きには使徒聖トマスを祀る寺院のそびゆる。寺内、宝石を散りばめたテーブルや金のランプに満ち、バルサム、消ゆることなく立ち籠む。聖トマスの亡骸の引き起こす奇蹟の数々、語り尽くせぬほどにして、その地に住むキリスト教徒もまた無数なり、と。<sup>1)</sup>

話の内容やインドからはともかく、いづこやも知れぬ東方からの高位聖職者の来訪と教皇との謁見は、一無名記者の年代記と、その場に同席したとするランスはサン・レミ修道院長オドの手紙に記録された。あまりにも信じ難いものではあったが、それでも中世を通じてトマス伝を初めとする伝承や文献により、あるいは異端に断ぜられたネストリウス派の東方流布により<sup>2)</sup>、またそこに赴いたアラビアやペルシアの商人や旅人により折にふれて西方に伝えられていた、東方にキリスト教徒の国もしくは共同体が存在するという噂は、ここに現実の証人をもったわけであり、そのニュースあるいは幻想が、第一回十字軍で征服したものの、

シリアのラテン国家と聖地エルサレムの守護や、イスラム教徒の反攻に苦戦を強いられていた西方キリスト教世界の注目を引くところとなったのも無理からぬ次第であった。

かくて二十数年後、第二回十字軍も差し迫った 1145 年、今度は著名なドイツの司教にして歴史家フライジングのオットーによって、ヴィテルボでの教皇エウゲニウス三世（在位 1145-53）との謁見の折、シリアはガブラから来たという一主教が、前年のエデッサ敗北によるラテン国家と教会の危急を伝え、西方キリスト教諸国の救援を涙ながらに訴えたことが記録された<sup>3)</sup>。そのシリア人僧の語るところは、次のごとくさらに驚くべきものであった：

今を去るほど遠くない年、ペルシアとアルメニアの彼方なる東方の果てに住む王にして司祭ヨーハンネースなる者、その住民ともどもキリスト教徒、ただしネストリウス派、ペルシア人とメディア人の王サミアルドス兄弟に戦を挑み、前述の首都エクバッタナを襲った。両王ペルシア・メディア・アッシリア人の軍隊を率いて応戦、双方逃げんよりは死なんが方を選んだがため、戦いは三日に及んだ。プレスビテル・ヨーハンネース——かく呼び慣わされる——ついにペルシア人を敗走せしめ、血みどろの虐殺をもって勝利者となった。また語るに、その勝利の後、前述ヨーハンネース、エルサレムの教会救援へと向かったが、ティグリス川まで来たるに、軍を車で渡河せしめることかなわず、冬には寒気により氷ると聞き及びし北方へと移動した。凍結を待つて滞ること数年、穏やかなる天候のため得るところなく、慣れぬ気候ゆえ数多の兵を失い、引き返すを余儀なくされた。彼の者、福音書に語られるマギの末裔と称され、そのごとく同じ民を支配し、彼のごとき栄光と繁栄を享受し、ためにエメラルドの笏しか用いぬとぞ言う。揺籠にキリストを礼拝しに来た己が祖先の例にならい、エルサレムに詣でんとせしが、前述の理由により妨げられたと伝えられる。されど、これはもうこの程度で充分であろう。<sup>4)</sup>

これが、プレスビテル・ヨーハンネースの名が文献に登場する最初とされるが、前の 1122 年の出来事と基本的に同じパターンであることが一見してわかろう。東方、インドからであれシリアからであれ、キリスト教高位聖職者の西方への来訪と、その僧のもたらす、彼方にキリスト教王国が確かに存在するという信頼すべき情報であり、その情報の都合のいい解釈とそれに伴う既成の東方像のさらなる増幅である。

オットーの伝えるシリア人僧の話の内容はしかし、相も変わらぬ虫のいい空想として退けるには、上にみるごとくあまりにも具体的かつ詳細であり、また当時



の状況によく即しており、その追真性からして何らかの根拠がその背景にあったことを予想させた。事実その頃、東方でイスラム教徒と他の民族の間で戦があり、前者が大敗を喫したとの噂がペルシアやシリアで広まり、ついで近東のラテン国家やビザンチンにも伝わっていた。その戦いとは、金に追われ西走してカラキタイに国を建てた西遼の耶律大石とセルジューク・トルコのスルタン・サンジャーハルの、1141年9月9日サマルカンド近郊での一戦のことであり、事実勝利したのは大石の方であった。さりながら、その勝者をネストリウス派とはいえキリスト教徒に仕立て上げたのも、ましてやマギの末裔としてエルサレム救援に馳せ参じようとさせたのも、あとはすべてその新たな情報の既成の東方像への強引な結び付けであり、勝手な期待と幻想であることには変わりなかった。<sup>5)</sup>

ともあれ、東方アジアにキリスト教王国もしくは信徒の強大な集団が存在するとの話は、かくて西方世界で確固たるものとなり、その国を統べるという司祭にして王ヨーハンネースの存在は、以下にたどるごとく、その後の歴史をも動かすまでに至るのである。

はたして1165年頃、現にそのヨーハンネースから時のビザンチン皇帝エマヌエル一世コムネノス(在位1143-80)宛書簡が世に現れるに及んで、その確信は決定的なものとなった。その歴史的意義もさることながら、われわれにとっての興味はそこに見られる世界像、なかんずく東方像である。そこにはギリシア・ローマの古典や文献、中世の神話・伝説、とりわけアレクサンデル説話、聖書と聖者伝、プリニウス、プトレマイオス、ソリヌスらに代表される博物誌や百科全書等により生み出され語り伝えられてきた東方に関するアイデアとイメージが凝縮して詰め込まれ、その中にさらに、その頃もたらされ始めた新たな知識や情報が奇妙な形で取り込まれているからであり、そこからわれわれは、この『書簡』の作者が確実に属するとほぼ一致して認められる十二世紀当時の西方人の東方像とひいては世界観をうかがうことができるからである。まずは以下、ツァルンケの復元になる原文にのっとなってその内容を掻い摘んでたどってみることとする。<sup>7)</sup>

神ならびに我らが主イエス・クリストの御力と御徳により、諸主の主プレスビテル・ヨーハンネース、ローマの舵取りエマヌエルに、その健康の健やかならんことと、[神の]恵みのさらに永からんことを(1)。

との挨拶で始まるこの書簡は、まずそれが、西方の皇帝・王侯君主や教皇ではなく他ならぬ東ローマ皇帝に宛てられていることと、冒頭から外交儀礼すら無視した尊大な調子が注目された<sup>8)</sup>。つまり、この世のすべての君主に対する優越を主張するヨーハンネースが、そのことを思い知らしむべき、もしくは対決すべき相

手・ライバルとして選んだのはビザンチン皇帝だったことを意味する。

それは、まず「我らが偉大の汝らがもとに知れ渡れる」ことを当然としたのち(2)、書簡を草した動機はそもそも、「汝、我らとともに正しき信仰を有するや否や、我らが主イエス・クリストをことごとく信ぜるや否やを知りたきがためなり」と、ギリシア人の信仰に疑問を呈することにあつたからである(3)。それというのも、自分たちは、死すべき人間であることを充分わきまえているのに対して、「汝の下らぬギリシア人どもは<sup>9)</sup>、汝を神と崇めている」(4)からであると、ほとんど偶像崇拜にも等しいと非難する。ついで、自分たちがいかに豊かで寛大か実際にやって来て視るがよい、賓客として遇し、帰りたければいつでもたっぷりと財貨を持たせよう(5-7)と勿体ぶつたあと、「汝の終末を想え、さすれば永遠に罪を犯さぬであろう」と一方的に宣する(8)。しかし、それ以上の宗教議論はなく、自らの信仰の正しさの根拠はどこにも示されているわけではない。東ローマのギリシア人は、西ヨーロッパ人からすれば「異端者」なのであって、今更証明するまでもなかったのである。以上のような出だしから、この『書簡』の背景には、分裂以来中世を通じて両キリスト教世界の間存在した宗教上・文化上の不信感と、当時十字軍運動下でますます激しくなりつつあつた政治的・軍事的対立抗争のあつたことがうかがわれよう。

次いですぐ自国の紹介に入る、「我、プレスビテル・ヨーハンネース、諸主の主にして、天が下なるあらゆる富において、かつ徳と力において、全世界のすべての王に立ち勝りいる」(9)と、物質的に優越するのみならず、精神的にも「敬虔なキリスト教徒」として、「慈悲もて帝国を支配し、貧しきキリスト教徒を保護し、…施しを与う」(10)と、己が善政も忘れず付け加える。かつまた、「キリストの十字架の敵を恥しめ、打ち倒し、御名の榮譽を讃えんがため、大軍を率いて主の墓に詣でんがものと願って止まぬ」(11)。この箇所が前述フライジングのオットーの記事をふまえており、十字軍遠征に非協力的どころか、サラセンと手を結んでキリスト教徒を裏切りさえしかねなかつたビザンチン宮廷に対する当て擦りであることは容易に想像されよう。さてその国は：

三つのインドを支配し、我らが領土は、使徒聖トマス<sup>10)</sup>の亡骸の眠る遠きインドの彼方にまで広がり、砂漠を経て昇る日のところにまで至り、傾斜地を経てバヘル<sup>11)</sup>の塔なる荒野のバビロンへと戻りくる(12)。<sup>11)</sup>

とすると、西はバビロンのあるペルシアもしくはエジプトから、東は三つのインドを越えてその果て<sup>12)</sup>、「日の昇るところ」まで、すなわち東方全体に及んでいたことになる。要するに当時の未知の世界全体である。ところが：

七十二の地方が我らに服属する。が〔その内〕キリスト教徒のは少なく、それぞれの王を戴くが、すべて我らが貢納者である (13)。<sup>13)</sup>

その国土全体が七十二の地方もしくは国に分かれていたのか、それとも司祭王の本国とそれ以外の七十二の属国があったのかは定かでないが、注目すべきことに、“プレスビテル”の名からする予想に反して、また前述の二つの記事とも違って、キリスト教徒は無数であるどころか、ごく「少ない」<sup>14)</sup>。とすれば、大部分は異教徒ということになる。ヨーハンネースが強調するのはそれよりも、彼らが貢納者であること、すなわち彼の支配下にあることである。とすると、彼が司祭であるにもかかわらず、住民の改宗は未だ果たされず、その征服は宗教的であるよりは軍事的・政治的なものにとどまっていることになるが、この矛盾についての釈明はない。

ついでいよいよ、その領上に見られる「驚くべきこと」どもの紹介へと移る。まず動物からで、「象、ラクダ、カバ、ワニ」などの現実の珍獣に始まり、「グリフォン、ラミア、ケンタウロス、サトゥルヌス」など神話上・空想上の動物、そして「ピグミー、犬頭人、巨人、キュクロプス」らの怪物たち、それに「フェニックスと呼ばれる鳥」など、「天が下なるありとあらゆる種類の動物」(14) があるが、名前が列挙されるだけで説明はない。また、植物への言及は一切ない。

作者が特記するのはむしろ、異人種である。といっても、キリスト教徒でないとするは、残るのは化物か怪物に近い存在しかない。まず何をおいても食人種であり、「動物や早産児の肉しか食わず」、誰かが死ぬと、親族や他人がそれを貪り食う (15C)。その名は「ゴグ・マゴグ」他十四におよび (16)、「マケドニア王アレクサンデル大青年が北方の高山に閉じ込めた」種族である。しかし、彼らがまだ生きていたからといって恐れる必要はない、何故とならば、彼らの棲み処たる東方は今やヨーハンネースの、つまりキリスト教徒の支配下にあり、望む時にそこから呼び出して「我らの敵に向かわせ」、「それを食べてもよいとの許可が与えられるや直ちに食べ尽くし」(17)、「敵を食い尽くすや、自分の居場所へと戻る」(18)、までに手懐けられ服従させられているからだという。

これら「極悪の種族」はまた、「アンチクリストの世代の完成前に地上の四方から現れて、聖なる者たちの陣営と大ローマ市を取り囲む」にちがいない(19C)が、その数が「海の砂ほど多くとも」驚く必要はない。何故なら、預言者のいうごとく、「審判の時至れば、神がその上に天から火を降り注ぎ、彼らを焼き尽くす」はずだから (20C)。つまり、それら異教徒や異民族にとっても時間と歴史は、『エゼキエル書』や『ヨハネ黙示録』に定められたとおりに展開し、その終末の予言を

逃れることはできない。<sup>15)</sup>

たとえこれら怪獣・化物・食人種たちが存在するにせよ、その国土は「蜜が流れ乳のあふるる」約束の地であることに変わりなく、蛙や蛇や蠍といった毒虫は害獣はいない (21)<sup>16)</sup>。それどころか、あふれるものがもう一つある。宝石で、文字どおり流れる。ある地方の「異教徒たちの間を通過して、イドヌスと呼ばれる川が流れ」、そこにはエメラルドやサファイアなどあらゆる種類の宝石が見つかる (22)<sup>17)</sup>。「イドヌス」とはインダス川のことであろうし、前述 1122 年のインドからやって来たという僧の話との類似性が注目されよう。また「アッシディオスなる草」が生え、その根を身につけていれば悪霊が近寄らぬ (23)。

そうした空想譚ばかりではない。インドとなれば、現実の財貨は何をおいても香辛料であった。「あらゆる種類の胡椒が生え、穫れ…麦や農作物、皮や布と交換される」(24)と、胡椒をめぐる交易の盛んな様子をうかがわれるばかりか、胡椒にまつわる情報は収穫の方法にまで及ぶ。「近隣の地域からあらゆる人々がやって来る」のだが、インドはまた、前の記述と矛盾するが、酷暑と蛇の棲息地としても知られていたため、森に火を放って蛇を撃退して「胡椒を木から収穫し、焙って乾燥させ」なければならない。しかし、「どのように焙るかは、外国人は誰も知るを許されていない」(25-26)と、勿体ぶる<sup>18)</sup>。ヨーハンネースとて無原則的に寛大というのではなかったわけだ。

ところが、その「胡椒の森」の在処となると、「オリンポス山の麓にある」ことになり、そこには日夜刻々と味の変わる清らかな泉が湧き出、そこから発した水は、「アダムの追放された地上の天国から三日行程のところまで達している」(27)。とすると、ヨーハンネースの東方には、「オリンポス山」もインドに含まれ、しかも「地上天国」と比較的近いところにあったことになる。それはさておき、その泉とは「その水を三度飲めば」一切病にかからず、「生涯三十二歳のまま」(28)でいられるという、中世に広くその存在が信じられた若さの泉である。そこにはまた、「ワシが運んでくる」ミドリオーシなる霊験あらたかな石があり、それを指にはめれば、魔法の光で「姿が見えなくなる」(29-30)。<sup>19)</sup>

この国最大の「驚異」はしかし、それら昔から語り継がれ知れ渡った、言わばもう誰も驚くことのない驚異ではなく、真に驚くべき新しい驚異でなければならない。何かといえば、「水のない砂の海」で、単に砂が海のように広がっているというのではなく、「砂は海と同じように波打ち、静止することがない」。しかも、その「岸边では様々な魚が獲れ珍味である」(31)。近くの山からは同じく「水のない石の川」が流れ下り(32)、岩や木などすべてを飲み尽くす (33)。これらはおそらく、何百年ものち近代の探検家たちによって報告される中央アジアの砂漠の流砂の現象が伝わったものであろう。<sup>20)</sup>

中世の幻想はすぐ現世利益と結び付かずにはおかない。そこには「不思議な効能を有する岩」があって二人の聖者によって守られており、やって来た者にキリスト教徒か否か尋ねる。その岩の窪みにはいつもは少ししか水が溜まっていないが、もし本当にキリスト教徒なら、水は三度高まってその窪みに入った者の全身を覆い、一生無病息災に暮らすことができる(34-37C)。キリスト教徒はやはりあくまで特権的な地位にあったわけだ。近くには地下をもう一つの川が流れ、宝石を運んでくる。時々地表に姿を現わすから、その時なら子供でもそれを拾うことができる(38-40)と、貴石への執着はどこまでも強い。

その川の向こうには「ユダヤの十支族」<sup>21)</sup>がいて、それぞれの王を戴いているが、彼らも「我らの奴隷であり貢納者である」(41)ことには変わらない。ともかくも、ヨーハンネースの国では税さえ納めればユダヤ教徒も共存を許されていたことになる。

東方はまた、ダンテの章でみたごとく、地理的極限性と気象的異常性とともそこからやってくる珍奇な品々、胡椒と並ぶ絹によっても知られていた。それらが組み合わされると、「サラマンダーという火の中でのみ生きる虫」がおり、その虫は「絹を作る別の虫のように自分の体の回りに皮をめぐる」ことになり、蚕についての比較的正しい知識もうかがわれる。ところがサラマンダーからは、「その皮を鞣して服や布を作る」し、その布は「強い火の中でしか洗えない」(42-43)。

22)

さて、ヨーハンネースの国は以上のごとく、「この世のあらゆるものにおいて豊かで、他とは比較にならない」(44・46・50)<sup>23)</sup>その無限の富を誇るだけではない。政治や倫理の面でも正義と平等に基づく平和で理想的な社会が実現されている。まず強調されるのが、「外国からの客人や異邦人」もすべて温かく迎ええられる(45)、ことであるのは注目される。異なる人種や宗教や文化に対する寛容が存在することを意味する。また、「誰一人貧しい者はなく」、泥棒や強盗もいず、阿諛や貪欲もなく、すべて平等で「何の差別もない」(46)。つまり、物質的にも理想的な社会が実現されている。しかも、その豊かさ故に道徳的に墮落することもない。最も憎まれるのは虚言で、死罪に処せられるか、社会的な死を意味し、名誉を失う(51)。姦通などの悪徳も一切なく、みんな真実を求め互いに尊敬し合う(52)。このあたりはしかし、いつの世でも誰にでも思いつかれる単純な美しい理想社会であろう。

いくら異教徒に寛容だといっても、あくまで敬虔なキリスト教徒としてその絶対的優越を主張することには変わりなく、「一万の騎兵と十万の武装兵」を率いて敵に対して進軍するとき、その絶大な力を示すため「金と宝石でできた大きな十三の十字架」を旗のかわりに先頭に押し立てるが(47)、いつもは「主イエス・

クリストの受難を偲ぶために」単に「木の十字架」を掲げるのみである。また「我らの肉体が土に戻る」ことを忘れぬよう「土の入った金の鉢」を携えるが(48)、自分が「諸主の主である」ことを示すために、「金の入った銀の鉢」を掲げることとする(49)。これらの箇所が、当時の西方キリスト教君主や教皇、とりわけビザンチン宮廷の華美と贅沢、宗教的・倫理的腐敗・墮落に対する非難と皮肉であることは容易に見て取れよう。

そのあまり、毎年大軍を率いて「荒野のバビロンに預言者聖ダニエルの亡骸を詣でに行く」(53)と、旧約聖書の預言者への依拠がここでも露骨である<sup>24)</sup>。それにまた空想を刺激されたのか、「その血から紅い染料の得られる魚」が獲れたり(54)、何せ広大なこととて、「強力の間人か異形の間人もいる」としてとって付けたように持ち出されるのが、「アマゾネスとバラモン」なのだが、彼らも「我らの支配下にある」(55)のはもちろんである。とすると、インドなら当然としてもバラモンも共存していることになるが、「異形の間人」の例として挙げられていることとて、それがどんな存在であるかどこまで理解されていたかは覚束ない<sup>25)</sup>。さすがに仏教への言及はなく、またお決まりの偶像祭拝非難も登場しない。

以上が前半で、後半は「我らが至高者」ヨーハンネースの住む宮殿の豪華と驚異の紹介にほぼすべて費やされる。<sup>26)</sup>

まず持ち出されるのは聖トマスのお話で、部屋も造作も「使徒トマスがインド王グンドフォルスのために用意したものそっくり」に造られている(56)。もっとも、トマスが用意した宮殿とは天上にある信仰の王国を指すはずであり、現世での栄華をむしろ否定するものなのだが、それには頓着せずにその華美が誇られるのは、正しい信仰のもたれるヨーハンネースの国では、すでに天上の王国が地上に実現されているとでも言いたいのであろうか。<sup>27)</sup>

それはともかく、インドらしくまず建築材は檜の本で外壁は「黒檀」だから、決して燃えることはない。屋上には金と紅玉の球があって、前者は昼、後者は夜輝いて照明の代わりをする(57)。宮殿には宝石や貴金属がふんだんに使われているが、それとて物質的富を誇らんがためだけではなく、中世には信じられていたそれら貴石の効験や性質を活用するためでもある。例えば、扉が角蛇の角をまぜた縞瑪瑙なのは毒をもって侵入する者を防ぐためであり、窓が水晶なのは明かりを通すよう(58-59)、決闘の行われる広場の床や壁がオニックス造りなのは闘争心を燃え立たせるため(60)、といった具合である。

寝室も金銀宝石造りだがいつもバルサムがたかかれており、寝台がサファイア製なのは欲望を抑え節度を保つためである。妻はみなとびきりの美女ぞろいだが、年に四度しか接しない、しかも子供をつくる時だけである、と肉欲は否定される。妻たちもまた貞淑で、「ダビデにとってのバテシバのごとく」崇められている

(61-64)<sup>28)</sup>。食欲に対しても禁欲的である。食事は日に一度だけで、宮殿では三万人が一堂に会食するのだが、人種平等はここでも貫かれ、客人や旅の者も歓迎され皆一様にもてなされる。食卓は緑玉、その脚はアメジストだが、これまた酔っ払うのを防ぐためである (65-66)。

ヨーハンネースの国は、宝石や自然の富と驚異に富んでいるばかりではない。人間知性の産物たる人工物や技術力をも誇ることができる。何かといえば一種の巨大に望遠鏡で、宮殿の前には四、八、十六、三十二、六十四と倍数的に増減する柱によって支えられた巨大な鏡があって、領土全体をくっきりと映し出し、国内での出来事が手にとるごとく見られるようになっている (67-72)。情報収集は、いつの世の支配者にとっても重大な関心事であった。

では、ヨーハンネースの政治がどのように行われたのか、前述の軍事力以外に組織・制度・法律等何ら詳らかでないが、ともかくもその権力と威光は広大な帝国に普く行き渡り、国民は敬意をもって権威に服する。支配下にある王侯貴族たちの奉仕は一種の参勤交代の制度にのっとって行われ、宮殿には「毎月、七人の王、六十二人の君主、三百六十五人の貴族が交代で仕える」。前述の理屈からすると、その大部分は異教徒ということになる。高位聖職者たちも同じで、「テーブルの右側には十二人の大主教、左側には二十人の主教、さらに聖トマスの総主教、サマルカンドの太守、スサの大太守がいる」 (74-75)。聖トマスの総主教は当然としても、スサは、「我らが栄光の玉座と王官の残る」とあるところからして、古代ペルシア帝国の古都ゆえであろうし、サマルカンドが何故ここに持ち出されているか定かかでないが、いずれにしても古代東方の歴史との関連からであろう。

29)

次いで、その豪華さと美しさにおいて劣らぬ「もう一つの宮殿」とその同様な奇跡、驚異の紹介が続く (B・C76-96)のだが、省略する。<sup>30)</sup>

いよいよ終わりに、「造物主が我らにありとある人間に勝る力と栄光を与え給うた」にもかかわらず、何故に「プレスビテル」(司祭)といった謙虚な称号をしが用いぬのかとくと思いをいたすがよ(97)、と再びビザンチン皇帝に呼び掛け、それに対する説明として、自分の宮廷では「給仕頭も献酌大臣も部屋係りも会計係りも料理長も」、すべて主教や大主教長や修道院長であると同時に王である(98)、事実をもってする。すなわち、富や物の所有において差別がなく平等であったことを示すわけとく、身分や位階においても聖俗ともに差別のない理想的な平等社会であることことを示す。これまた当時の聖俗両世界の現状に対する反措定であり、批判であることは言うまでもあるまい。

そして最後に、どのような根拠に立って計算されたかはともかく、「一方において四か月の行程に広がり、もう一方てにおいては何処にまで及んでいるやも分か

らぬ」 広大無辺の国土のこととて、その全てを説明することはとてもできぬ相談だから、とにかくやって来て直接自分の眼で確かめるがよい、とうまく相手の弱みを突き、さすれば「我らがまさしく全世界の諸主の主である」ことに得心がいくであろう(99)、と勝ち誇った後、「汝もし天なる星と浜の真砂を数えることのできようものなら、我らが支配と力を数えるがよい」(100)と、止めを刺して終わる。

以上、簡単ながらたどってきたごとく、またおりにふれ注記してきたごとく、ここに見られるのは、直接目にされあるいは体験された現実の東方ではもちろんなく、古代から中世の永きにわたって聖書や神話・伝説において創り上げられ受け継がれてきた、しかし現実よりも根強く存在する幻想の東方であった。しかも、その東方を構成する個々の伝統的な要素もどちらかといえば寄せ集めで、相互に矛盾・混乱しているものもあって必ずしも統一的で明確な東方像を形成しているわけではなかった。また胡椒の収穫法や砂漠の様など新しくより詳しい情報も、従来の東方像を増幅こそすれ改新するものとは言い難い。

ではこれは、単に既成の東方のアイデアとイメージ、事物と知識をただ並べ立てたものであるだろうか。それともそこに新たな並べ方を、したがって新たな東方像を見て取ることができるだろうか。

ヨーハンネースの東方は、地理的には三つのインドにまたがり、西は当時建国されたばかりのシリアのラテン諸国家に隣接するメソポタミアもしくはエジプトから、東は「日の昇るところ」にまで至り、その中にはバビロンをはじめスサ、サマルカンド、聖トマス寺院はもちろん、「地上天国」もあり、いささか奇妙だがオリンポス山まで含まれていた。南北への言及はない。とすると、西方キリスト教世界と、敵であるイスラム教世界を除く残りの全世界ということになるだろうか。そしてそのインドすなわち東方は、例によって国土は果てしなく広がり、無限の富にあふれ、あらゆる種類の珍獣・怪物が棲み、語り尽くせぬ驚異に満ちていた。ここまではいはば型どおりであり、何一つ新しいものはない。

異なるのは、その東方がキリスト教司祭王によって統治されているという設定である。東方像の系譜からすれば、その点にこそこの偽書の最大の特徴と歴史的な意義が存在する。そして、われわれの興殊もまたそこにある。すなわち、キリスト教王に治められることによって、東方はいかに変容したかそれともしなかったか、つまり自・他、自と異の観点からすれば、東方という他者、＜異なるもの＞は、キリスト教司祭というの支配下に置かれることによって、同化されるのか、それとも異化されたままに留まるのか、という点である。結論から言えば、＜異なるもの＞として留まる。

ヨーハンネースの国では、貧しき者は保護され施しを与えられ、旅人や外国人



は温かくもてなされ、盗みも阿諛も貪欲もなく、嘘つきも姦通者もいなかった。物質的・身分的差別はなくすべては平等に分かたれ、食欲や性欲も慎まれる。つまり、無限の富と絶対的権力とを有するにもかかわらず、謙虚さ故に自らをプレスビテルとしか称さぬほど精神的・倫理的に偉大で高潔な理想的君主のキリスト教的愛と慈悲の善政によって、その広大無辺の領土について平和と正義が普く実現されたのである。キリスト教徒に統治されることによって、東方アジアはついに理想国となった。

ところが、その領土はそれぞれの王を戴く七十二の地方に分かれ、しかもそのうちキリスト教徒は少なかった。とすると、様々な異教徒・異民族がおり、異文化が存在することになる。事実、イドヌス川は異教徒の地を流れており、宝石の川の彼方にはユダヤの十支族が住み、アマゾネスやバラモンまでいた。大切なのはしかし、繰り返し強調されるごとく、彼らがたとえ異教徒・異民族であっても「我らの」貢納者あるいは奴僕であること、つまりキリスト教王の政治的支配下にあることであつた。

いささか奇妙なことにしかも、司祭であるにもかかわらずヨーハンネースは、彼らに対する宣教の情熱を少しも示さない。十字架の敵イスラム教徒に対しては、聖墓の救援に馳せ参じたいとは願っても、これら自領土内の異教徒たちに対しては、それが可能な絶好の条件に恵まれているにもかかわらず、マルコ伝やマタイ伝にいう「全世界に行つてすべての人々に福音を宣べ伝え」ようとは一切しない。この点で、すぐ後に続く時代から始まる東方観と大きく異なり、東方は宣教の対象とは考えられていない。それどころか、自領土内での異教徒・異人種の軍事的・政治的支配に満足し、その存在を嘆かぬどころか、むしろ人種・宗教・文明・言語・自然・産物の多種多様であることを並べ立て誇つてさえいる。天が下なるあらゆる種類の動物をはじめ、数々の自然と人工の驚異はもちろん、人間の驚異である食人種やアンチクリストまでその威光の下に共存していた。それでも彼の地には蜜が流れ乳があふるのであつた。これは一体どうしてか。

そこにこそ、ヨーハンネースの東方の新しさとこの『書簡』の成功の秘密がある。すなわち、かの<異なるもの>どもは、その統治の正しさを疑わせるものとなるどころか、むしろその領上の広大さ・富の限りなさ・文明の豊かさを示すのみならず、その権力と威光の普く行き渡り、支配が正統であることを傍証するものとしてかえつて効果があり、必要とされるのである。現にたとえば、ゴグ・マゴグをはじめとするアンチクリストたちを、アレクサンデルは北方の高山に閉じ込めただけだったが、ヨーハンネースはそれを望む時に呼び出し、敵と闘わせるまでに服従させ手懐けているほどだつた。<sup>31)</sup>

当時、成つてさほど間もないまだ荒々しい西方フランク・ヨーロッパは、武力

においてこそ勝れ、富と権威と文明において東のローマ帝国にかなわず、しかもそのことを自覚していた。また、さらにその彼方にあるという東方の幻想もそのまま信じられていた。ヨーハンネースが繰り返し自らを諸主の主と称し、その徳と力とにおいてビザンチンはもちろん全世界のすべての王に優越していると誇るとき、その根拠となるのは、世界の果てにまで広がる土地と無限の富を有するという東方を所有支配していることなのであって、それを前提にして初めてビザンチンに対して優越感をもって臨むことができたのである。すなわち、そうして初めて、分裂以来ローマ帝国の正統な後継者としてその宗教的かつ政治的権威と伝統を誇り、かつ物質的富においても精神的文明においても新興ゲルマン・フランクはもちろん、旧ラテンの西方ヨーロッパに常に優越してきた東ローマ帝国に対して、かつまたより直接的には当時、皇帝・教皇の両権の帰属、イタリア支配、そして十字軍運動をめぐって、西側ヨーロッパ、とりわけ神聖ローマ帝国皇帝フリードリヒ一世バルバロッサと熾烈な対立・抗争関係にあったビザンチン皇帝エマヌエル一世コムネノスに対して、富においても権力においても倫理においてもそれに優越する現世の唯一の主として、あれほど尊大で挑戦的な態度をとり、その信仰の正統性まで疑うことができたのであった。「汝ら、下らぬギリシア人どもよ」、もし「天なる星と浜の真砂を数うることのできようものなら、我らが支配と力を数うるがよい」と。

そしてその時、数々の驚異や異なるものどもも、それが自らの支配下にあるかぎりこれまた、ビザンチンの領上には見られぬ豊かさとして誇示され、その支配の偉大さを証すものとなる。司祭王でありながら、自国にはキリスト教徒は少ないと平気で告白し、異教徒の存在を恥じず、宣教をもって同化せしめようとせず、むしろ誇るのもそのためである。また一般的には、自己中心的で絶対主義的なキリスト教ヨーロッパは、敵や悪魔や怪物や蛮族といった他者・異なるものを常に必要とし、と同時にその普遍主義ゆえにそれらを自らのうちに取り込み位置付けることを必須としたのだった。そしてそれは、現実の歴史においてはそうした他者の征服と支配へととなってゆく。

対東ローマ帝国というその動機はともかく、この『書簡』に単純かつ明快に透けて見えるのは、キリスト教徒すなわちヨーロッパによる、東方すなわち世界の政治的であれ宗教的であれ文化的であれ、征服・支配といういわばキリスト教ヨーロッパ帝国主義の夢なのであって、その夢は、序にもたどったごとく近代に至るまで断えることなく続き、また現実のものとなってゆくのだが、その中であって「東方」は、まさしくヨーハンネースの帝国においてそうであったごとく、またこれからたどってゆくごとく、＜異なるもの＞としてその支配を華やかに飾り、その栄光の偉大さを証すために必要とされるのであった。

その例には、コロンブスの「発見」から二十世紀の「大戦」まで、南米インドアの征服地からアジア・アフリカの植民地にまで枚挙にいとまがないが、たとえば、十八世紀半ばプラッシーの戦いでベンガル太守を破っていよいよ現実にイギリスのインド支配が始まったとき、勝利した東インド会社総督クライブは書いて言う：

私は自分の経験（推量ではありません）と他の人々の報告によって、インド民衆の特質と国の性格を掴むことができました。私がいくらかの自信をもって言えることは、この裕福で繁栄している国は、ヨーロッパ兵二千ほどの兵力でもって完全に征服できるということです……。<sup>32)</sup>

こうしてインドすなわち東方は、イギリス「王冠の最も輝かしい宝石」として文字どおりキリスト教ヨーロッパ世界を飾り、ヨーハンネースの夢はかくて実現したのであった。<sup>33)</sup>

ともあれ、この偽書は西方キリスト教世界に一気に流布し、プレスビテル・ヨーハンネースとその国の実在が確信され、東方のアイデアとイメージに新たなかつ重要な一項目を付け加えることとなったのみならず、現実の歴史においても、その探索および対イスラム同盟のための提携は差し迫った目標となり、東西関係において西方ヨーロッパと東方アジアの最初の直接的接触をもたらすに至る。

例えば、まず 1177 年、時の教皇アレクサンデル三世（在位 1159-81）はヴェネツィアで、「キリストにおけるいと愛でられし子、名高くして偉大なるインド人のヨーハンネース」に宛てて一書を認め、侍医フィリップスにもたせてやった。が、これは何の音沙汰ももたらさなかった。<sup>34)</sup>

次いで、教皇ホノリウス三世（在位 1216-27）の派遣した第五回十字軍はエジプトのダミエッタを占領し（1219 年 11 月 5 日）、優位にありながら、その総指揮官スペイン人法王特使ペラギウスは、ダミエッタとエルサレムの交換という、時のイスラム側の盟主エジプトのスルタン、アル・カーミルの和平提案を拒否し、周知のごとく結局はナイルの増水に足をとられて逆にダミエッタと交換に退却せざるを得なくなるのだが（1221 年 8 月 30 日）、その願ってもない提案を拒否した背景には、その年の春ペラギウスのもとに、キリスト教徒ヨーハンネース王（もしくはその子）ダヴィデが大軍を率いてペルシアに進軍してイスラム教徒を撃破し、エルサレムに向かって進んでいるとの旨の手紙が届き、それを真に受けて援軍の到来を当てにしたことが一因であったとされる。このダヴィデとは、実はチンギス・カンであり、いわゆるオトラール事件に端を発する 1219 年から 1224 年にわたる

その西征とホラズム王国征服が西方に伝わり、その軍隊にケレイト部のネストリウス教徒がいたことや、ヨーハンネースの伝説から幻想されたものであったことは、知られるとおりである。<sup>35)</sup>

ダヴィデの軍隊はもちろん現れなかった、がヨーハンネースへの期待は弱まるどころかむしろ高まる。1249年第六回十字軍を起こしたフランス聖王ルイ九世は、やはりダミエッタを占領し優位にありながら、今度もまた提案されたエルサレムとの交換を卑劣な取引きとして断固拒否し、結局は周知のごとくマンスーラの戦いに敗れて捕虜となり、全軍の撤退と身代金の支払いを引き換えに釈放を請わざるを得ない羽目に至るのだが、その背景にはやはり、東方のキリスト教徒と手を結んでイスラム教徒を挟み撃ちにすることに対する期待があったためとされる。

この場合はしかし、不確かながらも根拠があり、話はいささか現実味を帯びていた。1248年末ルイ王のキプロス島滞在中、ペルシアにおけるモンゴル軍司令官イルチギデイから派遣されたと称するダヴィドとマルコなる二人の使節が来訪して書簡を呈し、東方にはキリスト教徒が多数存在すること、大カアンはじめ多数の君主も洗礼を受けたこと、キリスト教徒を助けてエルサレム奪回に協力する用意のあること、等を述べ立てたからであった。<sup>36)</sup>

この時もダヴィデの軍隊はやって来なかった。しかし、ルイ九世とその前に教皇イノケンティウス四世(在位 1243-54)は、今度は自らモンゴル宮廷に使節を派遣し、かくて東方に関する直接の報告が初めて西方にもたらされるに至る。

では、ヨーハンネースが挑発したとおりに、ヨーロッパ人が初めて自らやって来て直接眼にし記した現実の東方とはいかなるものであったか。司祭王は存在し、その王国はかの『書簡』に描かれていたとおりのものであったか、それともはやその支配下にないとなれば違ってくるのか。そして東方像は、それらの報告によってあるがままのより正しく現実的なものへとよく修正されたのか、それともなお幻想の彼方に留まるのであろうか。それによってまた、＜異なるもの＞はどのような変遷を遂げるのか。

1) Friedrich Zarncke; 'Der Priester Johannes', 《*Abhandlungen der philologisch-historischen Classe der königl. Sächsischen Gesellschaften der Wissenschaften*》, Leipzig, Bei. S. Hirzel, 1879 (Capp. I, II, III), pp. 825-1030; 1876 (Capp. IV, V, VI), pp. 1-186.

無名作者の年代記 1122年の条「教皇カリクストゥス二世治下ローマへのインド人主教の到来について」'De Adventu patriarchae Indorum ad Urbem sub Calisto papa II', は同書 [1879] pp. 837-4; 「ランスのサン・レミ修道院長オド

の使徒聖トマスの奇蹟に関する同僚トマス宛書簡「Domni Oddonis Abbatis S. Remigi Epistola ad Thomam comitem de quodam miraculo S. Thomae Apostoli」(ローマ発、日付なし)は、同 pp. 845-6。両者とも出来事の筋書きは同じだが、話の細部はかなり異なる。オルシュキは、どこか東方からの聖職者の来訪という事実は認めながら、その話の内容については、西方キリスト教徒側の勝手な空想とみる：L. Olschki, *Storia letteraria delle scoperte geografiche*, Firenze, L. Olschki, 1937, pp. 194-214 ; Id., *L'Asia dei Marco Polo*, Firenze, Sansoni, 1957, pp. 376-91。

ベッキンガムによれば、この僧の出発地は、シリアのキリスト教の中心地であり聖トマス伝説ゆかりの地でもあったエデッサの可能性が高い(聖トマスの遺骨は230年頃エデッサに移され、その後13世紀にイタリア・コルトーナに持ち来られたとされる)：C. F. Beckingham, 'The Achievement of Prester John', *Between Islam and Christendom*, London, Variorum Reprint, 1983 (1966), pp. 3-24。

教皇庁と神聖ローマ帝国、カリクストゥス二世とハインリッヒ五世の叙任権及びイタリア支配をめぐる抗争の当時の状況については、A. フリッシュ(野口洋二訳)『叙任権闘争』創文社、昭和56年、pp. 228-54、等。ランスやローマ・ラテラーノ宮はその交渉の主要な舞台であった。

2) シリア人コンスタンチノーブル大主教ネストリウス(?-ca. 450)によって唱えられたネストリウス派は、431年エフェソス宗教会議で異端に宣告されたが、シリアはなお同派にとどまり、東方に広く流布した。中国では景教として知られ、唐初7世紀に伝わり後に迫害されて断ったが、西北部から中央アジアにかけて多く残った。12・13世紀当時では、ケレイト・ウイグル・ナイマンの諸族に同教徒が多数存在していたとみられ、とりわけケレイト族のネストリウス教徒はモンゴル帝国の政治・文化に大きな役割と影響を果たしたことが知られる：Yule-Cordier [1967], vol. I, pp. 101-23 (東亜史研究会訳編『東西交渉史—支那及び支那への道』帝国書院、昭和19年、pp. 195-237)；佐口透編『モンゴル帝国と西洋』平凡社、1980、等。

3) 謁見は同年11月18日。ガブラ Gabula は、ベッキンガムによればシリア海岸トリポリとベイルートの中間、ジャブラー Jablah(古代都市ビプロス Byblos)で、その主教ユーグ Hugh がアンティオキア公領主により派遣されたもの：Beckingham, *op. cit.*, pp. 4-7。エデッサ攻略の折ザンギーによって包圍されたエデッサの南ユーフラティス河上流のジャブール Jabbul とみる説もある。エデッサ伯領は、1098年3月9日第一回十字軍により成立したが、1144年12月23日モスールのアタベク、ザンギーの攻撃により落城し、その子ヌールッディーンに

よって 1146 年 11 月 3 日陥落する。これらの敗北により、クレルヴォーのベルナルドゥスの勸説に応ずるドイツ皇帝コンラート三世とフランス王ルイ七世率いる第二国十字軍 (1147 年) が起こる (作者のオットーもこれに随行している): ルネ・グルッセ (橋口倫介訳) 『十字軍』白水社、1989、pp. 53-5; 橋口倫介 『十字軍』岩波新書、1980; イスラム側からのものとしては通俗的ながら、アミン・マアルーフ (牟田口・新川訳) 『アラブが見た十字軍』リプロポート、1987、pp. 204-13、等。

オットー・フォン・フライジング Otto von Freising (ca. 1111-58)、神聖ローマ皇帝コンラート三世 (在位 1138-52) の異父兄弟、次の皇帝フリードリヒ一世バルバロッサ (在位 1152-90) の叔父、その外交官としても知られ、イタリア遠征にも参加、政治的・宗教的イデオログでもあった。哲学者・歴史家、主著『年代記』は、*Historia de Duabus Civitatibus* 『二つの都の歴史』 (ca. 1157) とも題され、神の都エルサレムと悪の都バビロンを対比して、天地創造より終末に至る世界の歴史を叙述したもので、中世ヨーロッパ最高の歴史書の一つに数えられる。前述の箇所はその第 7 巻、第一次十字軍から 1146 年までの年代記である: G. バラクラフ (前川・兼岩訳) 『転換期の歴史』社会思想社、昭和 52 年、pp. 119-54; C. H. ハスキンス (別宮・朝倉訳) 『十二世紀ルネサンス』みすず書房、1989、pp. 188-232; Giuliano Procacci, *Storia degli italiani*, Bari, Laterza, 1968, vol. 1, pp. 22-23 (斉藤・豊下訳 『イタリア人民の歴史』未来社、1984、I、pp. 51-2)、等。

4) Otto von Freising, 'Chronik, VII, cap. 33, Z. J. 1145, Monumenta Germanicae Historica, Scriptores, XX, S. 266. ラテン語原文は、Zarncke [1879], pp. 847-8; 英訳は、Baring-Gould, *Curious myths of the Middle Ages*, London, Rivingston, 1875, pp. 34-6; Yule-Cordier, *Travels of Marco Polo*, London, 1903-20; John Murray, 1926, Book I, p. 233; C. F. Beckingham, *op. cit.*, p. 4; 邦訳は、彌永信美 『幻想の東洋』青土社、1987、pp. 181-2 (抄訳)、等。

5) 西遼の建国は 1132 年、中央アジア・トルキスタンのチュー河畔バラサグン Balasagun、カラキタイ黒契丹とも呼ばれる。大石自身や家族は仏教徒だったが、同地方のウイグル族には多数のネストリウス教徒がいたと推定される。1141 年セルジューク (トルコ) のスルタン・サンジャール率いるイスラム教徒軍とサマルカンド近郊カトワン Katwan 及びディルガム Dirgham で戦い、これを破った。この戦いはアラビア史家イブン・アル・アティール Ibn el Athir (1160-1233) によっても早くから記録され西方に伝えられた。『遼史』卷 30、天祚帝 (第九代最後の皇帝、1101-25) 本紀にも、「・・・軍勢日盛、銳氣日倍、至尋思干 [セミスケン=サマルカンド]、西域諸国、撃兵十萬、號忽兒珊 [ホラサン] 来拒戦、・・・忽兒珊大敗、僵死數十里、駐軍尋思干凡九十日、回回国王来降、貢方物、又西至起兒漫 [ケル

マン]、文武百官、册立大石為帝・・・」とある（ただし、建国とサマルカンドの戦いの時間的順序が逆になっている）：羽田享「西遼建国の始末及び其の年紀」『羽田博士史学論文集』上巻歴史篇、京都大学東洋史研究会、昭和33年（初出大正5年）pp. 433-57; Zarncke [1879], pp. 850-71; C. E. Nowell, 'The Historical Prester John', 《*Speculum*》, vol. XXVIII, 1953, pp. 435-45; ドーソン（佐口透訳注）『モンゴル帝国史』東洋文庫、1987、1、pp. 140-4、等。

従ってオットーの記事のうち、「今を去ることさほど遠くない年」とは1141年に当たり、「ネストリウス派」とは、大石の軍隊にも多数の同教徒のいたこと、「サミアルドス兄弟 Samiados」とはスルタン・サンジャール Sandjar のマフムード Mahmud (1118-1131)・マスウード Masud (1131-52)兄弟を指すことになる。首都「エクバッタナ Egbattana」（今のハマダーン）は、古代メディアの首都であったことから類推されたものであろう。

次に、このアジアのキリスト教君主がなぜ'プレスビテル Presbiter'（司祭）とされ、また'ヨハンネース Johannes'と呼ばれたかが問題となるが、これについては、当時インドの一部と考えられていたエチオピアは、古くから単性論派キリスト教国として知られ、国王が司祭を兼ねており、エチオピア語で王が Zān, Žān, Ġān 等と書かれ、Jean, Gian 等と発音されたのを、ヨーロッパ人がヨハンすなわち Johannes と聞いたとする説（アフリカ・エチオピア説）、アジアにネストリウス派キリスト教徒がいることは古くから伝わっており、その一族ケレイト王国の王号ワン・ハン Wang-han（中国語王罕、モンゴル語 Onqan）がヨハンとして伝わったとする説（アジア・ケレイト説）、当時のジョルジアの君主 John Orbelian に比定する説（アルメニア説）、その他十二使徒ヨハネの不死伝説、等々諸説あるが、本稿では検討は省略する：前掲諸論文の他、E. D. Ross, 'Prester John and the Empire of Ethiopia', *Travel and Travellers of the Middle Ages*, ed. A. P. Newton, New York, 1926, pp. 174-94; Ch. V. Langlois, 'Les Merveilles du Pretre Jean', *La Connaissance de la Nature et de Monde*, Tome III, Genève, Slatkine Reprint, 1970 (1927), pp. 44-71; G. R. Cardona, 'Indice Ragionato', *Marco Polo Milione*, ed. V. B. Pizzorusso, Milano, Adelphi, 1982, pp. 698-703; C. F. Beckingham, 'The Quest for Prester John', *op. cit.*, pp. 291-310; 岩村忍『十三世紀東西交渉史序説』三省堂、1939、pp. 116-28、等。

6) ただし日付はなく、1165年とされるのは、アルベリクス・トリウム・フォンテイウム Albericus Trium Fontium の年代記 *Monumenta Germanicae Scriptores*, XXIII, 848, の同年の条に記されていることによるだけで、他に確証はない：Zarncke [1876], pp. 60-62; Ch. V. Langlois, *op. cit.*, p. 46, 等。ベッキンガムは、その年代記が書かれたのが1232年から1252年にかけてであって70年も経

っていること、アルベリクスはフランス・シャロンの修道士で広く旅行した形跡はなく、特に情報に通じていたとは思えないこと、他にも不正確な記事や混乱があることなどから 1165 年説を疑問視し、原写本がすべてビザンチン皇帝エマヌエル一世コムネノスに宛てられていることから、その在位中 1143-1180 年に書かれたことだけを確実とする。後にその皇帝から西方諸君主に転送されたことになっているが、これも疑わしく、ビザンチン宮廷側の記録には何も残っていないと言われる:Beckingham, *op. cit.*, pp. 10-11。

また、ギリシャ語で書かれたという原文は存在せず、写本の大部分はラテン語で、作者についても署名はなく、かつては東方すなわちシリアあるいはアルメニア・ギリシアのネストリウス教徒が自派の勢力を誇大に宣伝せんとしたものの説が強かったが、最近の研究では、その東方に関する概念と知識が西方ヨーロッパに伝統的なものの範囲を出ないこと、ラテン語聖書の文がそのまま使われていることなどから、西方キリスト教世界に属する教会関係者とする点でほぼ一致している（この小論もその前提のうえに立っており、その仮定が崩れると全く成立しない）。とりわけ、ギリシア語原文が存在しない以上、同書簡をラテン語に翻訳したと後書き (D.xx) に署名しているマインツの大司教クリスティアヌス Christianus (在位 1165-83) が最も有力視される: Ch. V. Langlois, *op. cit.*, p. 50; C. E. Nowell, *art. cit.*, p. 444; F. Fleuret, 'La Lettre de Pretre-Jean Pseudo-roi d'Abyssinie', 《*Mercure de France*》 1-VI, 1936, pp. 309-10。

ベッキンガムも、前述のフライジングのオットーの記事との類似性からして、その周辺に求むべきとする: *Op. cit.*, pp. 13-5。ちなみに、作者に比定されるそのクリスティアヌスは、フリードリヒ一世の書記長官として政治の舞台で活躍し、1170 年にはイタリアの領土問題をめぐる交渉のためビザンツ宮廷に、1173 年にはその係争地アンコーナを守るため指揮官として軍隊とともにイタリアに、派遣されている。とすると、1170 年以降に書かれた可能性が高くなる: L. Salvatorelli, *Sommario della Storia d'Italia*, Torino, Einaudi, 1974, pp. 122-52; 渡辺金一「十二世紀西ヨーロッパとビザンツ」『世界歴史』10 中世 4、岩波書店、1970、pp. 130-49、等。

7) Zarncke [1879], Cap. I, 3. 'Text des Briefes', pp. 909-34. ( )内の数字は同編者による節区分を示す。同テキストには、他の異写本類 (A~E) からとられた節が随時補足されるが、一部を除き省略した。[ ]内は筆者注。ツァルンケはヨーロッパ各国に散在する百近い写本を調査・考証し、原写本とみられるもの(15)と、加筆改竄がなされたとみられる後世のものに分け、後者をさらにその種類・程度により、A(4)、B(27+4)、C(18)、D(6)、E(6)、その他(6)に分類した。ほとんどすべて 13 世紀、ラテン語。後世の英語・フランス語・ドイツ語等のテキストの存



在も確認されている。近代語訳では、Baring-Gould, *op. cit.*, pp. 38-48 (底写本の明記なし) ; D. Ross, *op. cit.*, pp. 174-8 (同); Ch. V. Langlois, *op. cit.*, pp. 53-70 (1391年 P. Meyer 出版になる Roan d'Arundel のアングロ・ノルマン語版とそのオイル語散文訳を集成したもの) ; F. Fleuret, *op. cit.*, pp. 298-309 (15世紀末のテキストを書き直したもの) 等がある。いずれも抄訳だが、以上のうちではバーリン・ゲールドのものが最も原写本に近く、ラングロアのものが全訳に近い。邦訳では、岩村忍前掲書、pp. 118-22 (上記 Ross より) ; 長島信弘「プレステ・ジョアン伝説」『アルヴァレス、エチオピア王国誌』大航海時代叢書、岩波書店、1980、pp. 588-90 (上記 Baring-Gould より) ; 爾永信美前掲書、pp. 195-8 (上記 Langlois より) があるが、いずれも抄訳。\*[池上俊一「司祭ヨハネの手紙」(1)(2)『西洋中世奇譚集成 東方の脅威』講談社学術文庫、2009 ; 拙訳「プレステル・イオハネスの書簡」『原典中世ヨーロッパ東方記』名古屋大学出版会、2019、いずれも全訳]。

- 8) この箇所では例えば、自らはキリストと同じ<dominus>を使って、<dominus dominorum> と称しておきながら、ビザンチン皇帝に対しては、<imperator> (皇帝)すら使わず、<gubernator> (統治者、原意<舵取り>)と呼んでいる点にもうかがわれる (ただし、一応<Romeon ローマ人の>の称号は冠してある)。他の写本でも様々な称号が用いられている。
- 9) 原文 Graeculi:<Graeci ギリシア人>の卑小辞。
- 10) 教権と帝権という中世を通じての最大の問題と叙任権闘争の余波をここに見ることができる。東ローマ帝国では代々神権政治が行われ、エマヌエール一世は教権に対する帝権の優越を説き、西ローマ帝国の戴冠と両教会の統一を目論んでいた : L. Salvatorelli, *op. cit.* : 渡辺金一前掲論文、等。
- 11) ベッキンガムは、この<per declivum 傾斜地を経て>を<per declivm solis 日の傾くところ>とし、前の<ad solis ortum 日の昇るところ>の対句ととり、それぞれ<西へ><東へ>を意味すると解釈する : *Op. cit.*, p. 16。しかしながら、構文的にはむしろ前の<per desertum>に対応しており (<ad solis ortum>には<in Babilonem desertam 荒野のバビロンへ>が対応する)、またマルコ・ポーロにもペルシャ・ケルマーン地方にある<la grande clinee>に言及される(第38章)ことからして、ペルシャにはそうした地帯のあることが当時よく知られていたとも考えられよう。
- 12) インドは、中世ヨーロッパでは様々に分けられたが、その一つに、「近もしくは小インド」「遠もしくは大インド」「中インド」の三分法がある。それがどこを指すかは時により人により一定しないが、この場合は、前者は大陸部インド、中者は半島部インド、後者はエチオピアやアフリカ東海岸を指すことになる。聖ト

マス寺院のあるマドラスはコロマンデル海岸にあり、ここでいう<Ulterior India 遠きインディア>に合致する(次章注26)。

- 13) <provinciae 地方>は<属州>をも意味し、<tributarii 貢納義務のある>が使われていることから、古代ローマ帝国の支配形態を想像させる。その統治者には<reges 王>が使われている。
- 14) ネストリウス教徒であれば、多数の国民を改宗させたと誇るであろうし、この点からも作者が同教徒ではないことが推定されよう。また、自分をキリスト教徒とは言っても、ネストリウス派とはどこにも言っていない。
- 15) 「ゴグ・マゴグ」は、旧約聖書ではゴグに率いられたマゴグの地の軍隊で、神に敵対しイスラエルを攻めるが、神の火によって滅ぼされる(『エゼキエル書』38-39)。新約聖書では、千年天国の終りに解放されたサタンによって呼び出される「地上の四方にいる諸国の民」で「その数は海の砂のように多い」。「聖なる者たちの陣営を囲む」が、「天から火が下ってきて焼き尽く」される(『ヨハネ黙示録』20 7-9)とあるように、ここでも聖書の語句がそのまま引用されている。中世ではアレクサンデル伝説と結び付いて、王により鉄門(コーカサス地方の隘路)の彼方に閉じ込められた民族と解され、終末の時にはそこを破っておどり出し、キリスト教世界に殺到すると信じられた。後にさらに、『第四エズラ書』に登場する「イスラエルの失われた十支族」が、この閉じ込められた種族に比定され、人肉・死体・胎児等を食べる恐るべき食人種として描かれるに至った：ノーマン・コーン(江河徹訳)『千年王国の追求』紀伊国屋書店、1989、pp. 8-26, 64-82；彌永信美前掲書、pp. 452-4。次章にみるように、姿を現わすやモンゴル人も直ちにこのゴグ・マゴグに比定される。
- 16) 「乳と蜜の流れる地」は、旧約聖書ではエホバの「約束の地」カナーンの沃土を指す。これに対して、蛙・蠍・蛇といった気味の悪い動物たちは、無信仰や肉欲や不正の象徴として用いられる。
- 17) Ydonus。聖書では、地上の天国から流れ出る四川の一つはピソンと呼ばれ、一般にガンジス川に比定される。しかしその川も、金や琥珀やラピスラズリを産するハビラ地方を縫って流れるとされるだけで、川に宝石が流れるわけではない。これは砂金のことが誇大に伝えられたものであろう。他の三つは、ギホン(ナイルに比定)、ティグリス、ユーフラテス：『創世記』2・10-14。
- 18) 中世ではインドール(セビリア、570-636)により紹介されたという。オドリクス(第9章)、マンデヴィル(第18章)にも、大筋において同じだがより詳しく採集方法が報告されている。マルコ・ポーロでは、「胡椒を産する」と諸地方で注記されても、もはや珍しくないためか詳しい記事はみられない。
- 19) この後に、異写本類 E からとられた話が補足されているが、新旧の様々な伝

説・情報が中世キリスト教世界の文脈の中でどのように解釈され取り込まれ変容か典型的に示して興味深い。大要次のごとくである：

「世させられる界の南の果てに大きな無人島があり（これももちろん彼らの領土に入る）、周辺の住民は主が週に二度降らすマナ（天の恵み）だけを食べて生きている。彼らの寿命は五百年なのだが、百年毎にその島にある一本の大樹の根元に湧く泉の水を飲んで若返る。五百年経って死ぬと、死体はその島に運ばれ。例の樹の側に安置される。その葉はいつも青々と繁っているので、死体は腐ることがなく、アンチクリストの時が来るまでいつまでも生者のように色鮮やかである。その時至れば、地は自ら割れて大きく開き、彼らを呑み込み、再び閉じる。地中に入った彼らの肉体はそこで土となり、（アダムが造られた土の塵に返って）再生し、審判者として審判される者のところにやってくる」（E 1-5）。「一方、北の果てにはドラゴンの洞穴と呼ばれる地があり、無数の竜が棲む。それも飼い馴らされていて、インドの君候たちは結婚式や宴会の御供に伴い来たり、余興をさせて人々の目を娯しませる。ヨーハンネースたちは、彼らから毎年貢物として贈られてくる百頭の竜を空飛ぶ飛脚として世界のあらゆるところに派遣し、様々な珍しい出来事を知る」（E 6-7a）。

20) マルコ・ポーロには、ロプノール大砂漠のところで、そこを横断しようとする旅人を惑わす霊の声の紹介がある（第 60 章）が、流砂そのものへの言及はない。オドリクス（第 37 章「恐怖の谷」）、マンデヴィル（第 31 章「魔法の谷」）も同様。

21) 注 15 参照。

22) サラマンダー（石綿・石絨）は、古代から中国（火浣布）でもヨーロッパ・イスラムでも、火の中に棲む動物（鼠とか蛇）と考えられてきた。それが鉱物繊維であることを紹介したのは、ポーロが最初とされる。その糸から布が織られること、汚れたときは火の中に投ざると再び白くなる点等は同じである（第 64 章「ギンギンタラス地方」）：Benedetto [1928], p. 47; Yule-Cordier [1926], pp. 212-7、特に注 6 に詳しい；愛宕松男「マルコ・ポーロ所伝の火浣布(Salamander)について」『愛宕松男 東洋史学論集』第五巻、三一書房、1989(初出 1964)、pp. 315-332。

23) ただし、「馬だけは質も悪く数も少ない」（46）。ポーロにも、「この国には馬を産しない」とある（第 191 章「マーバール地方」）。

24) 『ダニエル書』に登場するカルデア王国(前 625-538)ネブカドネザル王（新バビロンの建設者でバビロン捕囚の主）の夢を解いたユダヤ人預言者。その夢やダニエル自身の見た夢は、この世を支配した四つの帝国の移り変りを表し、最初がカルデア王国、ついでメディアそしてペルシャ、最後がギリシャで、それが打ち倒されて神による永遠の王国が出現するとされる。その内容には特に関連もなくここに持ち出されているのは、終末論や福音書による歴史解釈の他に、ギリシア批

判からとも考えられる。これと関連して、天の神から「国と権威と威力と威光を授かり、人間も野の獣も空の鳥も……すべてを治め」「諸国・諸族・諸言語の人々」を支配するというネブカドネザル王も、その現世支配に関する限り、ダヴィデとならんでヨーハンネースのモデルとなっていることが想像される：C. G. ハウイ（高橋虔訳）『エゼキエル書・ダニエル書』基督教団出版局、1978、等。

23) この後に補足されている異写本からの一節に、「バラモンは数多く、純粋な生を送る正直な人間である。自然の理性が否定するものを持つとはない。すべてに耐え我慢する。そうしたものは必要ではないのだから、余計なものだと言う。彼らは生身の聖者である」(D・t)、とある。

バラモンは、3世紀の偽カリステネスのアレクサンデル説話で伝えられ、上にも述べられているその清廉質素な暮らし、妻の殉死、長寿等で知られていた：Olschki [1987], pp. 165-93; [1957] pp. 409-28。マルコにも詳しくかつ誇張した紹介がある(第194章「バラモン教徒発祥の地ウル地方」)。アマゾネスは、すでに前5世紀ヘロドトスによって紹介され(松平千秋訳『歴史』中、岩波文庫、1987、pp. 110-119)、北方スキティアに住むとされたが、後に中世ではアレキサンデル説話により、インドの一種族となった。

26) オルシュキは、当時の西方人の描く東方の驚異としての豪華な宮殿のモデルがビザンチンの宮廷であったことを諸文献にわたって比較検討し、ヨーハンネースの宮殿の描写をその最も早い例の一つとしてあげる：Olschki [1937], pp. 73-104、特に p. 93。作者がもし前述のクリスティアナスであったとすれば(注6)、現にコンスタンチノポリスを訪れていることからして、実際にそうであった可能性は大いにあり得る。なお同著者は、『東方見聞録』のクピライ・カアンの宮廷やジバングの宮殿の描写にもその影響の跡を見る(pp. 91-2)。

27) 聖トマス伝説によると、インド王グンドフォルス Gundoforus(紀元20-50年頃の実在が証される)は、トマスに壮麗な宮殿の造営を命じたが、彼はその資金をすべて貧しい人に分け与え、多くの者をキリス教に改宗させた。王は怒るが、その頃死亡した王の弟ガトが蘇って天国にあるすばらしい宮殿のことを語り、それがトマスが兄のために建てた宮殿であることを告げる：ヤコブス・デ・ウォラギネ(前田・今村訳)『黄金伝説』人文書院、1987、1、pp. 80-95。

28) ダヴィデが、家来の兵士ウリヤを戦死せしめて奪ったその妻。ために二人の間の最初の子は神に打たれて死ぬが、二番目の子がソロモン(『サムエル記下』11-12)。

29) スサ Susa は、前述『ダニエル書』との関連では、雄羊(メディアとペルシア)を打ち倒す雄山羊(ギリシア)の幻をダニエルが見たのが、「エラム州の都スサ、ウライ川のほとり」とある(8・1-27)。アレクサンデル王との関連では、東方遠征の

帰路(前 324 年)のいわゆる東西人種融合のためのペルシア人との集団結婚の地でもある。

サマルカンド Sarmagantin (Samarkand の俗形) がここに登場するのは、前述フライジングのオットーの年代記では耶律大石とサンジャールの戦闘地がエクバッタナとされていることからして(注 5)、その記事からとは考え難い。同市はギリシア時代から Marakanda として知られ、アレクサンデル遠征の戦場ともなった。いわゆるアレクサンドリア・エスカテ(いや果てのアレクサンドリア、今のコーカンド)はその東方あたる。プトレマイオスにもマラカンダとして記載される：*L'Extrême Orient dans la Littérature et la Cartographie de l'Occident des XIII<sup>e</sup>, XIV<sup>e</sup> et XV<sup>e</sup> Siècles*, par Ivar Hallberg, Göteborg, 1906, pp. 494-5; <Susa> pp. 494-5, <Samarcan> pp. 445-8。è

中世では、ヘラート(アフガニスタン西部)、中国と並んでネストリウス派の東方布教の主要拠点の一つであったことが知られる：Yule-Cordier [1967], pp. 101-45。なお、マルコもこの都市に一章をたて、そこにあるキリスト教教会(洗礼者にちなんでだが、これもヨーハンネースと呼ばれる)の円柱が宙に浮き上がったままになっている奇跡を紹介している(第 55 章「大都市サマルカン」、ただし彼自身はそこを歩いていない)。

30) この部分はほとんど異写本類 B・C からとられる。第二の宮殿のある市は Briebric (95・C)もしくは Bibric (D・xx)と呼ばれるが、同定されない。ちなみに、マンデヴィルは第一の宮殿をスサに、この宮殿をニサ Nysa(パルティアの古代都市、現トルクメニア共和国)に置く(第 30 章「プレスター・ジョンの王国」)。

31) ラングロワのテキストでは、そこに住む巨人たちはかつては敵と戦ったが、今は「我らが主によりただ働くよう定められている。我らが宮廷にはその何人かが鉄の鎖に繋がれており、人々はそれを楽しみに見物に行く」ほどである：Ch. V. Langlois, *op. cit.*, p. 65, n. 1。

32) プラッシーの戦いは 1757 年 6 月 23 日。ロンドン東インド会社会長ローレンス・サリヴァン宛の手紙：ブライアント・ガードナー(浜本正夫訳)『イギリス東インド会社』リポート、1989、p. 112、より(原著未見)。因みに日本については、例えばバリニャーノは、それがいかにさらに異質な世界であるかをほとんど興奮気味に繰り返し強調する：「第一に、日本においてはその性格、習慣、諸事、取り引き、および私たちの生活方法その他すべてのことが、インドやヨーロッパにおけると異なり、反対であります」(松田毅一他訳『日本巡察記』東洋文庫、1985、p. 3 sgg.)。

33) 最後に、この『書簡』の目的は何だったか、作者の意図はどこにあったかの問題が残る。この点につき定説となっているのは、オルシュキの政治的ユートピア

説であり、それによれば、聖俗両権を握る偉大な君主の理想像と、それに統治される理想国家を描き、もってして対立・抗争に明け暮れるヨーロッパ諸国に警鐘を鳴らし、君主たちのモラルに訴えることにあった。したがってこの書簡は、東方の「通俗的神秘化ではなくキリスト教時代最初の真の政治的ユートピアである。それを飾っているインドの驚異はそれゆえ、この理想国の描写に都合のいい文学的形式と最も印象的で宣伝効果のある表現を与えるための仕掛けにすぎない」(Olschki [1937] 1, p. 209. 同 [1957] p. 383 でも、もう少し抑えた調子ながら同じ説が展開されている)。すなわち、キリスト教司祭にして王ヨーハンネースの倫理的気高さと善政を描くのが主目的であって、東方の富や驚異はそれに華やかさを与える飾りであり、舞台装置として従属的な役割を果たしているにすぎない、というわけである。

この説はまた広く支持されている：E. Nowell, *op. cit.*, pp. 437-8; R. Wittkower, 'Marvels of The East', «*Journal of the Warburg and Courtauld Institute*», V, 1942, p. 181; V. Monneret de Villard, *Le Leggende orientali sui Magi Evangelici*, Città del Vaticano, 1952, p. 152 (未見)。

しかしながら、オルシュキはあまりにも一般化しかつ美化しているのではあるまいか。なるほど後世の多くの写本では、書簡はビザンツ皇帝のみならずバルバロッサはじめ西方ヨーロッパの諸君主にも宛てられている（例えば前掲書のうちでは、F. Fleuret の 15 世紀末テキストは「[神聖]ローマ皇帝並びにフランス王」宛、p. 298）。しかし、ツァルンケの原写本はすべてビザンツ皇帝宛であり（ただし、そのうち三つ(No. 1, 2, 15)は、「彼自身からローマ皇帝フリードリヒに転送された」となっている：[1879] pp. 877-81)、また形式的にも、上に見たごとく、ギリシア人に呼び掛けその信仰を糾すというものであった。たとえ当時のヨーロッパキリスト教世界の状況一般に対する義憤と批判が意識にあったとしても、作者がそれをカムフラージュするために上のような形式をとったとは考えがたい。したがって、後世の写本や出来事をも含めて歴史上に現れた“プレスター・ジョン現象”とでも呼ばれるもの全体を考えるならともかく、原写本に見る限り、あくまでギリシア人を対象としたものであって、原作者の意図もビザンツ批判にあったと取るのが素直であり、その成立の背景もそこに求めてゆくのが妥当であると思われる。

すなわち、遠くは分裂以来中世を通じての西側ヨーロッパ諸国と東ローマ帝国の宗教的・文化的対立や政治的・経済的争い、なかんずく前者の後者に対する抜きがたい不信感であり劣等感である。例えば、「西側のビザンツ観は極めて感覚的であり、偏見に満ちていた。ギリシア人の枕詞のように'不実な' '卑怯な' '邪悪な' '裏切り者の' といった形容詞が安易に使われ、何も知らないそして知ろうとも

しない人々にそれを信じ込ませた。しかし、その軽侮の裏には、ビザンツ世界の高い文化、洗練された社会、人々の富と優雅な生活、そういうものに欠け、あるいは劣っている西ヨーロッパ人の嫉妬心が透けて見えるのである」(橋口倫介前掲書、pp. 83-4)。また近くは、当時現実に十字軍遠征やイタリア支配をめぐる、この書簡にまつわる君主たち、とりわけフリードリヒとエマヌエルは相互に熾烈な争いを演じ、対立・連合を繰り返し、このギリシャ皇帝はムスリムと手を結ぶことも辞さないほどであった。こうした、ある意味ではイスラムに対してよりも根深いギリシャに対する近親的憎悪が、ついには 1204 年のコンスタンチノープル掠奪となって現れるのは周知の事実であろう：L. Salvatorelli、G. Procacci、グルッセ、マアルフ、橋口、渡辺等の前掲書・論文等参照。

次に、そのビザンツ批判を作者は何故このようにヨーハンネースに託するという持って回った形で行なったのか。簡単にいえば、本文でも若干触れたが、無限の富と驚異に満ちた東方を支配するというヨーハンネースは、当時知られていた最も豊かにしてかつ進んでいたビザンティンとその皇帝に優越する唯一の存在たり得たからである。つまり、その東方の現世的・物質的富の優越を前提として始めて、しかも精神的・宗教的にも高潔なキリスト教君主に仕立て上げることによって、西側世界に属する（ことは確実視される）作者は、ようやくビザンツ世界に対する劣等感を拭い去り、しかも読者に対してそのギリシア批判を説得力あるものたらしめることができたのだった。

内容的にも、記述の大部分を占めかつ主眼となっているのは、上にたどったごとく、現世的・物質的側面、すなわち領上の広大さ、無限の富、豊かな自然と驚異、多様な人種、豪華な宮殿等の記述であった。しかも、キリスト教司祭でありながら、自領土内における諸民族・諸言語・諸宗教の民の存在をむしろ誇っているほどであり、つまりその国はこれら異なるものの豊かさにおいてもビザンツを凌ぐものであることを言わんとしたのである。かくてこそヨーハンネースは、繰り返し強調するごとく、自分が「天が下なるあらゆるもの」において豊かで、「全ての者に勝る」と誇ることができたのだった。これに比べて精神的・宗教的側面、すなわち支配者の倫理性・社会正義・善政等は、なるほど彼の国がその物質面を誇るのみならず、後者を目的とするものとして持ち出されてはいるにしても、分量的にも内容的にも付随的な部分しか占めず、文体的にも取って付けたような稚拙なものであり、政治論と呼び得るほどのものとはなっていない。また、そうした君主及び社会の理想像ならば、他にも古代から中世の歴史と文献のなかに多くのアイデアとモデルを見出しえたであろうし、何も敢えてヨーハンネースに託す必要はなかったのではないか。自らプレスビテルと称しながら、キリスト教徒の少なさを恥じないのは、その称号の方がむしろ、事実「謙虚さゆえ」と断っている

ように、現世的支配の強大さを和らげるための飾りであったことを物語っている。

以上から、オルシュキのいうごとく、なるほど君主と国家の理想像を描いた一つの政治的ユートピアとなっているには違いないが、しかしそのユートピアを構成する物質・世俗と精神・宗教の両面のうち、主たる側面となっているのは前者であり、その無限の富と驚異に満ちた東方をキリスト教徒が支配するという意味での政治的ユートピアであって、支配者の人格や善政の方がむしろ、オルシュキが言うのとは逆に、それを美しく飾る仕掛け、舞台装置として用いられているにすぎない。と同時にこうして、西方人には未知だが二千年にわたって語り継がれ信じられてきた富と驚異の東方を所有するというヨーハンネースに語らせることによってこそ、そのビザンツ批判を効果あるものたらしめ、人々の注目を引くことができ、従って多大の成功を博することができたのであった。また、マンデヴィルに大々的に剽窃され、その書およびマルコの書と並んで、中世最大のベストセラーの一つとなった理由もそこにあった。随時挿入されている後世の異写本からの節の大半が、驚異や財宝ら物質的側面をより詳細に補足説明するものであることも、読者の興味がどこにあったかを傍証するものとなろう。これら問題については、別の機会に試訳も含めて改めて考察してみたい。

34) Zarncke [1879], 1, pp. 935-46。ただし、1177年9月27日付のその手紙は、ヨーハンネース宛とはなっているものの、書簡に対する返信であったかどうかは不明である。フィリップスの行き先も東方というだけで、エチオピアあるいは中近東方面であつた可能性も高いとされる。また、その作者フィリップスを『書簡』の作者とする説もあるが、一般には受け容れられていない。ただ、最初に反応を示したのが教皇であつたという点は注目に値し、1177年というのは、神聖ローマ帝国の帝権回復とイタリア支配を狙うフリードリヒ一世の皇帝軍に対して、ミラーノを中心とするロンバルディア同盟(1167年)とヴェローナ同盟(1164年)のムーネ軍が前年5月29日レニャーノの戦いで勝利し、翌年ヴェネツィアで休戦協定が結ばれた年であり、教皇アレクサンデル三世もムーネ側にたって出席していた。その6年後の1183年コンスタンツの帝国議会で正式の和平条約が結ばれ、かくてその登位以来30年にわたったドイツ皇帝とイタリアの抗争は一応の決着をみる。これにより皇帝権に対して教皇権は一息つき、後のインノケンティウス三世(1198-1216)を頂点とする全盛期へと向かうと同時に、そこで公的に承認されたムーネは大きな発展期に入ってゆく。ちなみに、もう一方の勢力ビザンツは、同じ頃1176年9月小アジアのミリオケファルムでルーム・スルタンのクルジュ・アルスラン二世に大敗を喫して決定的に衰退し、1204年のコンスタンチノーブル略奪で終止符を打つことになる：L. Salvatorelli, *op. cit.*, pp. 141-52; G. Procacci,



*op. cit.*, pp. 29-35 ; 森田鉄郎編『イタリア史』山川出版社、昭和 59 年、pp. 124-8、等。

35) Zarncke [1876], pp. 5-22。アッコンの主教ヴィトリー-Jacob von Vitry の 1221 年 4 月の偽書簡。例えば、「この [インド人の]王ダヴィデ、強力この上なく、軍事に長け、天性智に富み、戦において敗れることなき者を、異教徒どもの鉄槌として、不信者マホメットの有害なる教えと呪うべき律法が滅ぼされるよう、我らが時代に呼び起こしたが、人それをプレスビテ・ヨーハンネースと呼ぶ」(p. 14) : 岩村忍前掲書、pp. 136-40 に同書簡の詳しい紹介と翻訳がある。また、ドーソン前掲書 2、補注三、pp. 368-72 に、Eccard, 《*Corpus historicum medii aevi*》第 2 巻からとられた、一ネストリウス教徒によるというタルタル国王ダヴィデについての同様な記事が紹介されている。もっとも、ダヴィデ待望は交換拒否の心理的背景の一つではあっても、主たる理由ではなかった。他にも、聖地のみならずエジプトをも征服しようとい論んだこと、アラブ側の内紛などにより状況全体が十字軍側に有利と判断されたこと、とりわけ神聖ローマ帝国フリードリヒ二世率いる大軍の到着が間近いと待たれていたこと、等があったとされる。

36) Zarncke [1876], pp. 78-81。この書簡そのものにはヨーハンネースの名は登場しない。これについては、偽物説と本物説がある。これに応じてルイ王は、1249 年 2 月ロンジュモーのアンドルー他の一行をモンゴルの宮廷に派遣したが、グユク・カーンはすでに崩御しており、その皇后にして摂政オグル・ガイミシュに謁見した。1251 年 4 月帰国した一行のもたらしたその返書は、仏王に臣従を要求するものであり、王は使節を派遣したことをいたく後悔したと伝えられる。それでもなお接触の可能性を探って 1253 年に派遣したのが、次章に触れるルブルクの一行である : ドーソン前掲書 2、pp. 258-65 (同書簡および返書の訳を含む) ; 佐口透前掲書、pp. 65-7、等。



図2 ドイツのヨーハンネース  
 (Hartmann Schedel, *Nuremberg Chronicle*. 1493)



図3 エチオピアの玉座のヨーハンネース (1558年のアフリカ図)